

上顎審美領域におけるインプラント抜歯即時埋入即時負荷

森本, 太一郎

<https://hdl.handle.net/2324/1654789>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（歯学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名	森本 太一郎			
論 文 名	上顎審美領域におけるインプラント抜歯即時埋入即時負荷			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	森 悦秀
	副 査	九州大学	教授	吉浦 一紀
	副 査	九州大学	教授	中村 誠司

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

インプラント治療の発展に伴い、上顎前歯部などの審美領域では、抜歯後即時にインプラントの埋入を行い、即時に上部構造を装着する単独インプラント抜歯即時埋入即時負荷 (**Immediate placement and provisionalization of single implants; IPPSI**) の術式が普及してきた。しかし、この術式を用いた際の術後の唇側骨の形態変化に注目した研究はまだ少ない。PUBMED とハンドサーチによって、IPPSI に関する過去の研究の中でインプラントの唇側骨の形態変化を調査した文献を検索したが、これらの中に規則的で確実性のある方法で、術前と術後の唇側骨の形態変化を計測評価した文献はみられなかった。そこで本研究では、上顎前歯部領域に対しインプラント抜歯即時埋入即時負荷を行った際のインプラント周囲唇側骨の形態を、コーンビーム CT (**Cone Beam Computed Tomography; CBCT**) を用いて計測し、その経時的変化を評価することを目的とした。

研究 1 では、上顎前歯部領域に対し IPPSI を行い、術後約 1 年経過した 12 本のインプラント (12 名) を対象とした。CBCT を用いて術前のインプラント埋入相当部位および術後 (12~15 か月) のインプラント周囲唇側骨の形態を計測した。その結果、術後の唇側骨幅と術前唇側骨外側からインプラント表面までの水平的距離との間に高い相関が認められた ($rs= 0.839$, $P= 0.001$)。調査した項目は、いずれも術前骨幅との間には有意な相関は認められなかった。

研究 2 では、複数歯領域におけるインプラント抜歯即時埋入即時負荷 (**Immediate placement and provisionalization of multiple implants; IPPMI**) について、研究 1 と同様の評価を行った。上顎前歯部複数歯領域に対し IPPMI を行い、術後約 1 年経過した 19 本のインプラント (8 名) を研究の対象とした。その結果、調査した項目はいずれも IPPSI と IPPMI の各グループ間に有意差は見られなかったが、IPPMI の術後 (12~15 か月) の骨吸収量は、研究 1 で得られた単独歯部位の骨吸収量よりも大きくなった症例があった。

以上の結果から、上顎前歯部単独部位に対する IPPSI に際し、術前唇側骨外側からインプラント表面までの水平的距離が術後の唇側骨の維持に重要であることが示唆された。また、一度に複数歯を抜歯して IPPMI を行うことは、術後の唇側骨の維持という観点からは単独歯部位と比較して不利となる状況があった。そのため、治療計画を行う際には、CBCT の唇口蓋側断面だけでなく横断面なども考慮する必要があると考えられた。

本研究は、上顎前歯部の美的領域においてインプラント治療を如何に行うべきかを示す新知見を見出しており、博士 (歯学) の授与に値するものと判断された。